なお、蛇足ながら、あえて注文をつけるとすれば、『共武政表』に記載されている集落の採録が、国により精粗があるように思われること、また、挿入されている地形図の一部に水車記号が見にくい図があること、さらに水車記号を知らない層が増加しているので、記号の凡例を付けるなどの細かな配慮も必要ではなかろうかと思う。ただ、このような注文は、ごく些細なことでしかなく、本書の学術的価値をいささかも減ずるものではないことは申すまでもない。

いずれにしても初めに述べたように、本書公刊の意義は比類なく大きいと考える。本書は、歴史地理学が経済史、技術史、産業考古学など関係する隣接諸科学に対し、誇りうる成果であり、それら諸科学への影響は極めて大きいと思われる。なお、著者は稼動中の水車についても精力的に調査し、成果を学会でも発表、その蓄積は大きなものがあり、本書の続編が切に望まれる。さらに、外国、とりわけ西アジアの水車について、多数の論考を持つ著者による「世界の水車」などの書物の刊行を期待しつつ、この拙い書評を終わりたい。

塚口義信著『神功皇后伝説の研究』

寺西貞弘

『古事記』『日本書紀』(以下『記・紀』)には、到底史実とは考えられない不合理な物語がある。それは『記』では上・中巻に、『紀』では巻第十までに、共に応神天皇治政下とされる時代以前の記述に集中している。私たちは、このような不合理な物語を「伝説」とよぶ。ところで、『記・紀』所載のこのような伝説を対象とした科学的研究の歴史は、かなり浅いものである。それは終戦まで吹き荒れた、天皇とその統治の正統性の拠所となる『記・紀』をあまりにも神聖視したためであろう。そのため、これら伝説に科学のメスを入れることができず、それらは研究対象の域外におかれがちだったのである。

戦後、このような風潮が一掃されるや、それまでの古代史研究への見直しが必至となったが、伝説もまた例外ではなかった。これら伝説に科学的研究の先鞭をつけたのは、津田左右吉氏の一連の論文であった。津田氏は一連の『記・紀』本文批判の中で、不合理な記載をすべて後代の潤飾と断定し、それを排除した記載によって古代史の再構築を試みた。このいわゆる津田史学は、計り知れない成果を上げ、戦後古代史研究の起点となったことは周知である。しかし、伝説に関していうならば、戦前の研究が信じる

ことを出発点としていたのに対し、津田史学のそれは疑うことから出発していた、と評し得るだろう。そのため、華々しく批判し尽された伝説は、そのほとんどが後代の潤飾によるものとされ、古代史研究史料としての価値を半減した。

批判し尽された伝説は、その後歴史研究の対象として扱われることが少なくなったが、近年再び伝説に目をむける学者が多くなって来た。それは、『記・紀』所載の豊富な伝説を、なんとか古代史研究の史料に使えないものか、という努力の現われでもあろう。このような気運の中で、塚口義信氏が『神功皇后伝説の研究』を著わしたことは、大きな意義をもつものといえるだろう。

本書は、副題を「古代氏族伝承研究序説」とし、第一章から第八章までに論文九篇を配し、あとがきを付した体裁になっている。ここで本書の内容を概観してみよう。

◎

神功皇后の和風諡号は、『記』では「息長帯日売」、『紀』では「気長足姫」、と共に「オキナガタラシヒメ」である。『記・紀』伝説として精製された神功皇后（オキナガタラシヒメ）伝説は、息長氏が氏族伝承として伝えた「オキナガヒメ」の物語と、民間に流布していた「オホタラシヒメ」の物語とが一体となったものであることを、伝説中の民間伝承的要素と、息長氏の果した役割から詳細に分析したものが第一章「大帯日売考―神功皇功伝説の史的分析―」である。それまでの伝説研究が、不合理な伝説により合理的解釈を施そうと試みたり、全体の型式を論じ、その類似性に基づいて結論に至るという方法をとっていたのに対し、要素の分析による研究法をとったため、新しい研究方法を提示した大作として、学界に好評を博した。著者をして、若き伝説研究の先駆者の名を欲しいままにせしめた代表作であり、本書の巻頭を飾るにふさわしいものである。この論文をうけた第二章「神功皇后伝説の形成とその意義」は、二つの要素をもつ神功皇后伝説が、伝承荷担者息長氏によって語り継がれ、舒明・皇極朝頃に『記・紀』所載の伝説の形を整えたとする。第一章が伝説の要素の研究であるというならば、本章は時間的流れの中で、最終的に『記・紀』伝説の形へと完成して行くまでの過程を論じたものである。ここにおいて、著者の神功皇后伝説研究は、要素的かつ時間的研究の骨子を一応完成させたものと思われる。本書の第三章以下は、上述の研究方法を駆使して、未だ不明な神功皇后伝説の細部に渡る個別研究ないしは関連研究がなされている。

第三章「『日本書紀』応神天皇即位前条の「一云」について」は、本伝説中の誉田皇子が気比大神と名を換える一連の物語を扱ったものである。著者はこれを誉田皇子の母方氏族（息長氏）有縁の地で行われた成年式であると推定し、それを多くの文献史料の民俗学的解釈によって論証した。この論考は、誉田皇子の気比大神参拝の必然性と、母方氏族息長氏の役割を証明したことに大きな成果があるが、それのみならず、『紀』の応神天皇即位前条中の「一云」の割注が本注であることを論証したことは、『紀』の文献批判の分野においても注目すべきであろう。

第四章「香椎廟の創建年代について―オホタラシヒメと八幡神―」は、八幡神の母神であるオホタラシヒメが神功皇后であると認識され、そのためオホタラシヒメを祭神とする香椎宮が、神功皇后を祀る香椎廟となったとし、その時期を神亀元年とした

が、本論考は日本の宗廟思想の根源にせまるものでもある。また、『八幡愚童訓』等後代の編述に成る史料によって論証する過程には、なお不安を覚えるが、それら史料中の民間伝承的部分を、より古いものとすることにはそれほど問題ないだろう。ここに著者の史料を開拓して行く意欲的態度を垣間見ることができよう。

著者は、本書において常に史料を開拓し、独自の方法論をもって論理を展開しているが、これは著者の一種の卓越した才能といえる。ところで、このような才能を持つ者は、往々にして先学の研究を無視しがちである。しかし、第七章「神功皇后の出自系譜に関する一考察—諸説の検討を中心として—」を一読すれば、著者が研究史の緻密な検討にも労を惜んでいないことが窺える。

第五章「継体天皇と息長氏」は、継体天皇即位の事情を通して、神功皇后伝説の伝承荷担息長氏の勢力基盤を摂津・河内・山城にも認め、山城南部綴喜にその故地を求めた。そのため、息長氏の系譜に山城南部の地名を冠する人物を散見できる理由も解明できたと思われる。また、合せて盟友関係にあった和珥氏・茨田氏の存在をも明らかにしている。さらに、第六章「『佐紀盾列古墳群』に関する一考察」は、大和東北部に所在する佐紀盾列古墳群が、和珥氏・息長氏に関係深い王族を被葬者とすると提言し、それを古墳の分布地域とその地域に係わる『記・紀』記載から裏付けようとしたものである。特に考古学と古代史の接点を模索した点は注目すべきである。これら第五・六章によって、近江を本拠とする息長氏の中央豪族的要素の根源が明らかになったといえるだろう。

第八章「武内宿祢伝説の形成」は、神功皇后伝説の時代を含め『記』では六朝、『紀』では四朝に仕えた武内宿祢の伝説形成過程を考証したものである。著者はこの伝説中の氏族伝承的要素を分析し、これを葛城臣・紀直両氏の氏族伝承であるとし、その素型の成立を両氏族が活躍する雄略朝とした。さらに、推古朝には蘇我氏の氏族伝承的要素が付加され、『記・紀』編纂時にいたって、政治的意図をも含めて最終的な完成をみたとする。本章は、著者の伝説研究の方法が普遍的に応用でき得ることを、自ら証明したものともいえるだろう。ただ、敢えて苦言を提するならば、伝承荷担者の異る神功皇后伝説と武内宿祢伝説とは、かなり重複する記載部分を有しているが、その両者の関係に言及すべきではなかったかと思う。もちろんこのような苦言は、本章の論理の展開や結論に何等遜色を与えるものではないが、本書の『神功皇后伝説の研究』というテーマの下では、少々違和感がある。

◎

以上で本書を概観し終えたが、与えられた紙数も残り少なくなって来た。ここで、本書の根底にある著者の伝説に対する研究方法について述べたい。それは敢て一言でいうならば、伝説中の要素の分析と伝承成立過程の尊重である。近年いわゆるモデル論が一般に受入れられているが、これによると伝承中の要素はすべて後代のものとされ、それが遠い昔に投影されたとするものであり、投影された時代とモデルになった時代の間に、途方もなく長時間の空白を認めなくてはならない。もちろん、伝説が『記・紀』に採録されるためには、モデルになる時代を正当化するための政治的意図を認めなくてはならないだろうが、伝説中に活躍す

る氏族の存在を無視することは決してできないだろう。ここに、著者が本書で行ったごとく、伝説中の氏族伝承的要素を分析する研究の必要性が生じる。そしてこのように考える時、氏族伝承が他氏族や政治の影響を受け、『記・紀』伝説へと精製されて行く過程を看過してはならないだろう。

本書を紐解く直前、私は文化人類学者 A. M. Hocart の著書 "Kingship" (Oxford University Press 1927) を読む機会を得た。彼は二者の慣習パターンの類似をもって安易にそれを伝播した、と断定することに対して、次のように述べている。

私たちが外見の特徴ばかりに注意を払っているかぎり、今日の解剖学を知らなかった時代の古い動物学の進歩ほどのものさえ、決して得られないだろう。

この言葉は、私が拙い言葉を連ねる以上に著者の研究方法を評し得るだろう。すなわち、伝説の外見が後代の史実に類似しているからといって、そこに安易な関係のみを求めるのではなく、伝説中の独自な要素の分析を怠ってはならないのである。彼はさらに「そこに伝播がないというのではなく、私たちが問題とすべきは、現今さわがれている類似した様相のかなたに存在している。」と述べている。これもまた、著者の問題意識が単なる記載様式の類似に目を奪われるのではなく、それを否定するものでもなく、それ以上のもの、すなわち伝説中の氏族伝承的要素の分析に及んでいることに付合するものである。

◎

以上、本書の大雑把な紹介と拙い評を書き連らねたが、日頃何かと御指導に預っている著者に対して、これは不遜な行為ではないかと思いつつも、これも責務と思い切った次第である。何卒御容謝願いたい。なお最後に、本書によって、従来史料として扱うことに苦慮されがちであった伝説の性格がかなり判明したわけである。これによって、伝説を史料に用いた古代史研究が、今後盛んになるであろう、という予言的一言を付しておきたい。

昭和五十五年十二月六日、関西大学史学会大会が視聴覚教室で開かれ、次のような研究会表と特別講演がありました。

〈研究発表〉

古代総領制の再検討—国司制成立の一視点— 中西正和
楽市楽座研究における一視点 播磨良紀
一九三〇年代の朝鮮における総動員体制の展開—「皇国臣民化」政策を中心に— 増田順計
尖頭器インダストリーの発生について 山口卓也
奈良朝末期に於ける銭貨対策 森明彦
『播磨国風土記』における伊和大神伝承について 石田淳子
ドイツ・ハンザ以前の北欧商業 小西陽子
熊沢蕃山の経世論 遊佐教寛
食生活と野生地下茎類 河田智子
ウスマーンのコーラン結集に関する問題 宮崎正直
弥生時代後期土器器種構成に関する二・三の問題 西川卓志
『月山叢談』にみえる葡萄牙人の中国来航 福田和則
「住吉大社神代記」について 酒井敏行
摂津国と高一族—建武年間における— 茨木一成

〈特別講演〉中世の堺 泉澄一教授